

ごたいへいきしらいしばなし

碁太平記白石噺

〔解説〕

安永九年（一七八〇）江戸外記座にて初演。紀上太郎、烏亭焉馬、容楊黨の合作による全十一段の時代物です。由比正雪の乱に、奥州白石であつた姉妹の仇討ちの実話を絡ませた筋書きですが、仇討ち物なので時代を太平記の時代に置き換えています。七段目で姉妹が巡り会う「新吉原揚屋の段」は、姉妹の言葉使いの違いがおもしろく、芝居でも人気となり度々上演されています。

〔新吉原揚屋の段あらすじ〕

大黒屋の傾城宮城野は、大黒屋の亭主惣六が連れてきた田舎娘おのぶが故郷に残した妹だと気付き、二人きりになったところで母親が持たせた証拠を互いに見せ合い、再会を喜びます。しかし、おのぶの口から父母の死を聞き、妹とともに父の仇討ちを決意し、廓を抜けだそうとします。それを立ち聞きしていた惣六は、曾我兄弟の仇討ち物語を引き合いに出して二人を諫め、その時が来るまで待てと諭すのでした。

（一般社団法人 義太夫協会発行）

新吉原揚屋の段

入相の、鐘さへ早く、暮れ果てゝ廊のうちは万灯会、歌舞の菩薩の色揃へ、わけて全盛宮城野が部屋は上品奥二階、簞笥長持鏡台の、埃取りまで綾錦袱紗なりける有様なり

見やる宮城野おのぶが傍、『もしやそれぞ』と摺り寄つて

「さつきからの話を聞けば、姉を尋ぬる人そふな、奥州はどちらの生まれ、何といふ所ぢやえ」

「アイサア、奥州は白坂近在、逆井村といふ所」

「フウその逆井村といふ所に、与茂作といふお人があらふがの」

「アイサ、その与茂作といふのはめらしが父」

「ヤアそんならわしが妹」

と縋り寄るを突退けて

「イヤサ／＼、母の常に言はしやるには、『姉さあの方にもしるしがある、それを証拠に名乗り合ひ、委細心底打明ける』と言ひめした、それがあんなら早ふつん出し、見せてくんせえ姉さあ」
と懷かしながら油断なき

「ヲ、利口な人／＼、疑がやるも尤も」

と立つて簞笥の袋棚襖開けば恭しう、浅草寺の觀世音、扉表具に押し並べ、飾り置いたる筒守り見るに妹も疾し遅し首にかけまく壺井の守り

「コレ／＼、この姉が国を出る時、母様が大事にせいと下さんしたこの守り、父様は楠家のご浪人ゆゑ、河内の国壺井八幡様のお守り、それを持つてゐやるからは妹ぢや／＼コレ、よふ顔見せてたものふ」
「ヲ、姉さアでござるかいのふ、逢ひたかつた」

と諸共に、嬉し懷かし鎚り寄り、ほかに詞もなくばかり

かくぞといざや宮城野が座敷へ出ぬを不思議さに、

来かゝる亭主惣六が、様子ありげな部屋やまの体、忍んで事を立ち聞くと。知らず姉妹お姉妹ひそ／＼話

「ヲ、妹、よふ尋ねて来てたもつたの、年端もいかぬそなた、父様なりと母様なりと、いづれぞ付いてお出でゝあらふ、ガもし道中ではぐれてか」

と、問はれて『わつ』と声を上げ

「ア、コレかう巡り逢ふからは、悲しい事も何にもない、泣いては済まぬ、サどうぞ」

と、尋ぬる姉の心もそゞろ

「エ、遠国隔つた姉さあ、それで何にも聞かねえな、父は五月田植の時分、代官志賀台七という悪侍に」

「ヤア／＼何と言やる」

「サアぶつ斬られてお死にやり申した」

「ヒヤア」

とびつくり差込む癪

「ア、コレ姉様いの／＼」

「とつとモウ悪い時、そふしてどうぢやその後は」

「サアおらだけでもすんでの事殺さるゝところ、庄屋の伯父さあが駈けつて来て、力んでみても肝心の、証拠なければ父は犬死、雉子と鷹なりや敵討ちの勝負もならず、すごろ／＼、そんだの許嫁のご亭にも対面はしたれども、これもこのお江戸さあへ帰り申す、後はおらだアけと母とばかり、頼りない身に下地の大病」

「ヤア／＼お煩ひでもあつたかいの、シテご本復なさつたか」

「イエ／＼六月十六日に、悲しやつひにお死にやり

申した」

「ヤア／＼スリヤあのご養生も叶はなんだか／＼いの」

「コレ話さあ聞いてさへそれがいに歎かつしやるもの、直きに見とらへたおらだアけが心、コレ泣かつしやるは道理だけれど、頼りに思ふ姉さあ、また病氣おこしてはなほか済まねえ／＼」

「イヤ、イヤ／＼、なか／＼煩ふやうな事ぢやない、そふしてどうぢや／＼」

「サア、なしよにもかしよにもおらだアけ一人、庄屋の伯父さアが引取つて、『奉公しろ』と言ひめすけど、何の奉公どころかい、口惜しいと悔しいで、後先思はず、檀那寺へ駆込ふで、板東順礼すると言ふて笈摺もらい、国元さアを突つ走つたも、そんだに尋ね逢つたら、姉妹心一致にし申いて、父の敵が討ち

たいばかり、道中すがらの艱難も、そんだに逢ふが樂しみに、がいに苦勞とは思はなんだ、しかし逢つたらかつぱりと、しよろつ骨が抜けたやうな、コレそれがいに歎かつしやる手間で、妹遙々尋ねてよふ来てくれた、めぐいめらしと言ふてくんさい姉さあ」

と、あやも泣入る稚氣に長の旅路の憂き苦勞、思ひやるせも宮城野に、続くは末の松山を袖に、波越す涙なり。歎きの中にも姉はなほ、妹が背を撫でおろし

「ヲ、その様に思やるも尤も、しかしそなたは父母に、長ふ添やつた身の果報、コレこの姉を見やいのふ、年貢に迫つて父様は水牢、その苦を助けふばかりに、コレこの廊へ身を売つたを、思ひ返せば十二の年、そなたは五つ子顔さへ見知らず、父様の

ご最期や、母様の死に目にも逢はぬといふ悲しい不孝な、はかない事があるかいの、かふした事とは露知らず、この妹は健な知らぬ、父様母様、お煩ひでもあらふなら、よもや知らして給らふもの、便りのないを杖柱、首尾よふ年季を勤めたら、国へ帰つてお二人に、樂させまして、どうしてと、色や浮気を嗜んで、勤め大事と許嫁の殿御の事も、そなたの事も、恋し懐かし思ふのを樂しみ暮した甲斐もなふ、名乗り合ふたは嬉しいが、悲しい話聞く姉が心も推してたもいの」

と、手を取交す姉妹が涙々を、立聞きも貰ひ泣きして立分の、暖簾も濡るゝばかりなり

積もる話は富士の山、かず／＼多き涙の隙

「こんな事を聞かふはしか、借つて読んだる曾我物語、兄弟の人々も、つひには父御の敵討ち、コリヤ泣

いているところぢやないわいの、ア、コレ、肝心のことを忘れてゐた、この姉が許嫁の夫、この江戸に居やしやすとの事、そのお方の名所、定めて覚えてゐやらふのふ」

「ソリヤ忙しさに何にも聞かない」

「ヲ、モそれを知らぬという事があるものかいの、さふいふことなら敵の顔も」

「それ知らないでよいものか、目眼のでつかな、鼻の平たい男ぶり」

「ア、コレもうよい／＼、壁に耳、ご浪人こそなされたれ由緒正しい武士の娘」

「ヲ、めらし姉妹ぢやてゝ、おのれやれ、敵討たいで置ふか」

「ヲ、よふ言やつた出かしやつた／＼、幸ひ奥の大騒ぎ、あれに紛れてこの家を立退き、ヲ、そふぢや

そふぢや」

と妹が帯締め直し我が身も共に、小棲かいしよげ身拵へ、立退かんとするところを、暖簾引切り駆け出る亭主

「コリヤどこへ」

「フ、旦那様のいつの間に」

「おりや最前からアイヤ、たつた今こゝへ来た、ガわが身たちは敵、イヤサア、堅い約束の男があるゆゑ、こゝを駆落ち、コレ悪いぞや、そしてマアその田舎娘を知つてゐやるか」

「アイ、イ、エ」

「知るまい／＼で、昨日浅草で抱へて戻つたわいのふ」

「旦那様、私らが今の話」

「サア聞いたでもなし、また聞かぬでも」

「それ聞かれたら赦さぬ」

と、突出す懐剣さすかの姉妹鏡台の、鏡押取りちやう／＼ぱつしり

「ヤ何と違ふたものか、違はぬものは姉妹、イヤ、この鏡台の鏡にうつる二人の顔似たりや似たり、花あやめ杜若その五月雨の暗き夜に、敵を討つたる曾我兄弟、仮名本の曾我物語、アこゝにあり合ふこそ幸ひ、おれが読んで聞かそふわい、ドオレドレエ、『光陰惜しむべき時人を待たざる理、隙行く駒つながぬ月日重なりて、一萬は十三歳になりにけり』ナこの道理、河津の三郎祐重といふ名ある勇者、大名の息子殿でさへ五つや六つの頃よりも、思ひ立たれた親の敵、なみ大抵のことではなければ討たれぬものじや。コレこゝをよふ聞きや、大名の後室ともいはれる人が、曾我の太郎祐信殿へ、二度の嫁入りせられたも

謀、ガまた弟息子の箱王丸を、いとしばなげに坊主にせふと言はれたも、敵工藤祐経に、油断させふためばかり、その年月の憂き艱難、無念口惜しい事のある条、これまで何ぼも芝居にして見せるぢやないかいの、継父の祐信殿も大名、役に立たずの貧乏人と後指さゝれたも、兄弟の子供衆に、実父の敵が討たせたい武士の意気地、コリヤコレ陰徳といふ大義心、その上鬼王庄司左衛門といふて、伊東家の老臣があつて、幼少な子供衆に、昼は終日劍術稽古、また夜もすがら机の上、忠孝の道を教へ、成人の後におよんで、兄貴を十郎祐成、弟御を五郎時致と名乗らしたも、北条殿といふ烏帽子親があつたさかいぢや、マア近い譬へは、おれが様な不粹、むくつけな親方でも、親方ぢやと思ふてたもるし、こつちもまた抱への奉公人ぢやと思へば、何事によらず引けは取ら

しとむない、マゝこんな事は言はいでも知れたことぢやノ、ガ今のやうな話を聞けばおりや見逃したい／＼、ガコレ／＼をよふ聞きや、首尾よふそなたが逃げ果せてからが、悲しい事は遠国生まれ、しつかりとした心当てもなふて江戸中をうろ／＼、うろつきやるを、内外の者が見付け『ヤ申し旦那、きやつはどこそこにゐまつせ』と言ふ事聞いて『アゝえゝわい、打つちやつて置け』と親方の身ではどふも言はれぬ、ソリヤモウわが身たちばかりでもない、この廊へ来る奉公人に親孝行か夫のためでない者は一人もないわい、あれも孝行ぢや、これも貞女ぢやとそれなりけりに仕舞ふては、こつちも遊女商売取り置かねばならぬ、ガおれに成人の息子でもあつて、抱への新造呼出したり、色狂ひに身を打つと聞けば、『ヤイ極道め、ばいまくつてのける、勘当ぢや』と強

意見する親の身が、人様の大事の息子殿が見えると『きやつはえらい放錢ぢやわい、コレ頼もしそふなお客ぢやほどに、随分大事にかけや』と知恵を付けるマこんな得手勝手な商売はなけれど、コリヤコレ浮世の身過ぎ世過ぎ、そふいふ身分のこのおれでも、慈悲と情けといふ事は不斷心に忘れはせぬ、マちよつと言ふてみようなら、この惣六は最前言ふた、鬼王庄司左衛門ぢやと、思や、ほかに烏帽子親の、北条殿といふ様な、後楯でも出来てから、さつきの様に、思ひ込んで突つかゝつた懐劍、おれにさへつい叩き落されるやうな事では、まさか敵に出会ふた時、すつぽんの間にも合はぬほどに、おれが言ふ詞に従ひ、ナウコレ／＼サ、この道をも稽古して、鍛練の熟した上では、ぐつと／＼尻持つ合点、コレ駈落ちの尻もつて行かふとは言ふまい、急くところではないほ

どに、大事の勤め、駈落ちせふとは無分別お客大事に勤めてたも、サ、合点がいたか／＼」

とつど／＼に、曾我物語の引つく／＼り、読み切り講釈一方を、頼もしげある亭主なり

二人は飛立つ忝け涙、身にも胸にもあり余り

「エ、有難ふござんす」

と、姉が拝めば妹も、たゞ伏し拝むばかりなり

「ヲ、嬉しいは尤も、義を見てせざるは勇なし、わが身たちの様な奉公人、見立て抱へたと言や仰山なが、おれが眼鏡は大方違はぬ、礼言ふ事も何にもおよばぬ、ノコレ、人の眼鏡に悟られぬ様、随分ともけはひ化粧も美しうして、奥の座敷へ、ソレ遣手の政はぬぬかい、湯を持つて来てやれやい、しげりはぬか」

と呼出して、言付けるのも売物に、花も実もある轡

の惣六生粹の、淀まぬ座敷は大騒ぎ、幫間末社が弾
く三味に、乗つて飲むやら唄ふやら、現たわいの喜
見城、意見上手の親方が、こもる情けに宮城野が、妹
を部屋におく座敷引き別れてぞ、入りにける

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

ひこさんごんげんちかいのすけだち 彦山権現 誓 助劍

〔解説〕

天明六年（一七八六）大坂道頓堀、竹本太郎座初演。十一段続きの時代物。作者は梅野下風、近松安藏。劍の達人、毛谷村六助の仇討ちを描いた物語。

〔あらすじ〕

長州藩の武芸師範吉岡一味齋いちみさいは、恋と劍術の遺恨から、郡音成の家臣、京極内匠きょうごくたくみ（後に微塵彈正）に殺される。一味齋の妻お幸と、娘のお園・お菊は仇討ちの旅に出るが、妹のお菊は子の弥三松を残して返り討ちにあつてしまう。

豊前彦山の麓、毛谷村に住む六助は百姓だが、一味齋から劍術奥義を授けられ、劍の達人として知られていた。母を亡くし喪に服した日々を送っている六助の所へ、微塵彈正という男が現れる。老い先短い母のため、試合に負けてくれと六助は頼まれる。実は小倉藩は、六助と試合をして勝った者を召し抱えると立て札をたてていたのであった。親孝行の気持ちに動かされた六助は、試合に負けてやる。

いっぽう、杉坂では、山賊に化けた京極内匠の一味に男が襲われ命を落とす。水汲みから戻った六助は、この

男が連れていた男の子を家へ連れて帰り、身元が分かるように着ていた服を干しておく。そこへ一人旅の老女が休息を求めて現れる。六助は快く家で休ませてやる。さらにその後、虚無僧も現れ「家来の敵」といきなり六助に斬りかかってきた。実は虚無僧は女で、しかも一味斎の姉娘お園とわかる。

六助とお園は一味斎が決めた許嫁であつた。そして、先ほどの老女は一味斎の妻お幸、六助が連れてきた子供は一味斎の孫とわかる。お幸は二人に祝言をさせ、一味斎の形見の刀を六助に与える。そして、次第に先ほどの微塵弾正こそ敵の京極内匠であることが明らかになる。六助たちは一味斎の敵を討つために出かけていくのであつた。

毛谷村の段

てこそ入りにける

後には不審とつ置いつ、思案吹き散る春風に、梅が

香慕ひ、鶯の囀る声に法華経も、既に暮れぬと告

げぬらん

折節竹の、音も冴えて、吹きくらしなる虚無僧の、宿

求めんと籬に寄り

「ム、こゝに乾してあるこの四つ身は、たしかに

覚えある小袖」

と、取らんとするを

後ろから

「コリヤ盗人め」

と二三人、掴みかゝるを

寄せ付けず、振り廻したる尺八の、たけた手利きに

ぶう／＼ども、眉間肩先腕骨背骨、ぶちのめされて
散り／＼に皆われ先と逃げ帰る

六助内よりきつと目を付け

「見れば売僧の偽虚無僧。よつほど味をやりをつた」

と、なじる詞を

聞き咎め

「ナニ偽虚無僧の売僧とは」

「ハテ掟に違つた身の廻りといひ、第一宗門の姿で

喧嘩口論ならぬ筈。又常人が理不尽を云ひかけても

随分如法に済ませよとは、本山からの戒めでないか、

その上尺八の本手は吹かず、今時流行る雑な手を吹

き歩くからは、偽物と云うたが誤りか。山賤はして

いれどそれ程のことは知つてゐる。なんとでござんす

梵論字」

と、詞に一癖さる者と

見てとるこなたも笠脱ぎ捨て

「オ、その返答して聞けん」

と、ずつと入るより替筒かえづつに、仕込みし短刀抜き放ち

「家来の敵」

と打ち掛くるを

ひらりとかはし、しつかと取り

「アハ、ハ、ちよつと見るから女子おなごとは悟った故に

咎めて見た、が敵と云はるゝ覚えはないぞ」

「ヤ覚えがないとは卑怯な奴。杉坂のほとりにて五

十有余ゆうよの侍を手につかけ、路銀は勿論妹が忘れ形見の

稚子まで、奪ひ取った山賊め。赦しはせじ」

と振りほどき、鋭き切っ先

無刀の六助。抜けつ潜りつあしらふ手練てだれ

逃さじものと付き廻す

屏風の内より

「伯母様か」

と駆け出る稚子

見てびっくり、不審ながらも小脇に引ん抱き、心赦

さず身構へたり

「コレ小父様伯母様が来てぢや。太鼓叩いて見せて
いなう」

「オ、合点ぢや／＼後に／＼」

「イヤ今ぢや。早う／＼」

と頑是なう廻せば

廻る子可愛がり、弄もてあそび箱を引き寄せて

「ソレ今鳴らすぞ。コレマ聞かしやれや。二十三日

母者人の四十九日、杉坂の墓所を戻りがけ、泥坊め

らが二三人、五十ばかりな侍を、切るやら突くやら

蹴り殺し。見るに見兼ねて片端からのめらせ、介抱

すれどもものも得云はず、その子を指差して拝んだば

かりがつくり往生。目前敵の盗人めら。踏み殺して谷へ蹴込み、連れて戻つてその子に問へど差別はなし。そこで思ひ付いたあの着る物。門口に乾して置いたは、その子の所縁ゆかりを知らうため。心が早う届いたか、現在の伯母御に渡せばこつちも安堵。ようまア尋ねてごんしたの」

と、悦ぶ体に偽りなき、真実見ゆれどなほも根を押し

「しかとその詞に違ひはないか」

「イヤ何が怖うて偽り云はう。くどい尋ねにや及ばぬこと」

「シテこな様の名はなんといふ」

「六助といひまする」

「ヤアなんと」

「サア毛谷村の六助という山賤でごんす」

「ヤアスリヤ八重垣流やえがきの達人と音に聞こえた六助様か、エ、」

と呆あきれて取り落とす

子は狼狽うろたへて逃げ込むとも

知らず構はず六助を、うつかり眺め、見とれある

「今のやうに云うても疑ひ晴れず、やつぱりおれを敵にするか」

「エ、わつけない／＼なんの家来の一人や二人、どうなとしたがよいわいな」

と、前に寄り添ひ、後ろに立ち

「テモマ天晴れよい殿御。マアなによりか落ち着いた。イヤ／＼まだ落ち着かれぬことがあるわいの。

イヤ申しお前にはアノ女房様がござりますかえ」

「イヤ様子あつて女房は持ちませぬ」

「ありやせまいがな、ないかえ／＼。オ、嬉しや嬉

しや。それでほんまに落ち着いた。コレイナアお前の女房は私ぢやぞえ。サア／＼女房ぢや／＼」

と、かきたくる程今までも、逢ひたう思つた重荷が

下り、三衣姿も茶袋に、して見たがりの水仕業、袈

裟も襷とかけ徳利

「酒も上げうし夕飯の、拵へせう」

と釜の下、薪のしめり燃えかぬる

「火吹き竹は」

と尺八を取り違へてはをかしがり、ひとり御機嫌

六助は、承知内儀のふり売りを、持て余したるむつ

と顔

「とんと訳が知れぬ、けふほど希有な日はない。見

ず知らずのわる達が、イヤ親にならうの、かゝぢや

のと、押し入れ女房の手引きした、あの子も滅多に

油断はならぬ。全体こなたはマア誰ぢや」

と、尋ねに

『はっ』と心付き、俄に行儀改めて、云ふべきこと

も後や先

「常々父様の仰るには、『豊前国毛谷村六助といふ

者こそ剣術勝れし器量の若者。行く末はそちと聚合

はせ、吉岡の家を相続せんと、おとづれ通じ置い

たるぞ』と、仰せを守るこの年月。廿の上を越しな

がら眉をそのまゝいかなこと鉄漿も含まぬ恥ずかし

さ。推量なされて下さんせ」

「ウゝスリヤ其許は、吉岡一味齋殿の」

「ハイ娘の園でござります」

「これはしたり」

と手を取つて無理に上座へ、押し直し

「まづ何か差し置きお尋ね申したいは、御親父一味

齋殿。ご健勝でいまにお勤めなさるか。御老体の

ことなれば自然のお疲れにて、もしご病氣など起り
りはせぬかと、寝ても覚めても心ならぬはこれ一つ
と、問はれて園は涙ぐみ

「申すもあへないことながら、おいとしやと様は、
すおう隣国周防の山口といふ処でな」

「ヤ、何が何と、ド、どうなされた」

「口惜しや闇々と、欺し討たれて儂い」最期」

「ホイ」

『はつ』とばかりにどうど座し、拳を握り悔やみ泣
き

園は取り分け悲しさをやるせ涙のくどき言

「ほんに浮世と云ひながら、見に憂きことのかくば
かり、重なるものか父上の敵を願ふ門出に、かどんで可哀や
弟は盲目の、儘ならぬ身を悔やみ死に。後に見捨て、
まま故郷を、出づるもちりぢり離れかたもとぐ。在り所あをか探す

その内に、悲しや妹も劍けんの難。父上のみかそもやそ
も二人三人が味氣ない、刀の霜と消え残る母と私が
みたり憂き苦勞。頼りない身の上もなき、頼りの人に廻り
逢ひ、私が心の奥底を明かすは二世のわが夫、必ず
見捨て、下さんすな。可愛と思うて給はれ」と甘え
嘆きて伏し沈む

時に障子のうちしはぶき

「ホ、師匠を慕う誠こそ、遙かに届き冥途より、えん閻
浮ぶに帰る一味斎。対面せん」

と聞こゆれば

思ひがけなくお園がびつくり

「ヤアそう仰るは母様か」

と、嬉しさとつかは押し開く
内につこと以前の老女。にゅうわ柔和の面皺の波、打掛着
なし稚子の手を引き連れて立ち出づるを

見るよりはつと飛びしさり

「師の後室こうしつとは夢些いみじか存ぜぬこととて最前は、無骨のあしらひ無礼の段ひとえに御免下されかし」

と誤り入つてぞ平伏へいふくす

「イヤナウさつきに逢うたその時は、婿殿むことも 姑しゅうとめ

とも互ひに知らねば他人も同然。今こそ親身しんみ泣き寄

りし、親子がためには鉄くろがねの立て通したる娘が操みさお。

不憫と思ひ睦むつまじう夫婦になつて下さらば、本望遂ぐ

るに疑ひもなきわが夫つまのこの魂。婿引き出に」

と差し出せば

「ハア、こはありがたき師の形見。辞退申さず頂

戴せん」

と押し頂かんきし猷々いんこんの、盃三さんくどからず、ひねた生娘きむすめ

けふよりは、手折たおらせ初はつむる花嫁御

母も喜ぶその処へ

「こゝぢや／＼」

と杣そま仲間遠慮なき骸がら戸板にのせ、どや／＼と昇き込
んで

「コレ六助殿聞かしやませ。二十三日のことであつ
たがよ。この斧おの右衛門えもんのお婆ばばが見えぬとて、仲間中
が手分けをしての」

「オ、テヤ何が所々方々を尋ね歩き、やうやうと杉
坂どばしの土橋の下で見つけた処がよ。このやうなおかい
こ絹を引っぱらせ、むごく殺してありましたよ。敵
がとつてやりたけれど、うらどもでは何として／＼。

サ、／＼そこで頼むは六助殿」

と云ふに駆け下り死骸の傍、立ち寄つてとつくと見

「ム、スリヤこの死骸はそちが母か。アノこれがフ
ン」

と眉に皺、思案の体にて

柚仲間

「コリヤ斧右衛門。しめり伏さずと頼みやれ」

と、引き起こされて泣いぢやくり

「アイ／＼皆のお云やる通りぢやよ。敵を取つて下しやませ」

「オ、氣遣ひすな。今に敵は取つてやる。その死骸大事にして内へ去んで香花とれ。サア早う連れて行け。早う／＼」

と六助が

詞を勢に斧右衛門

「ア、そのやうに云うて下さるのが婆様のためにはお寺様の御引導。ナウ皆の衆」

「オ、テヤあの人ア、云ははりや、ちつとも氣遣ひ」

泣き顔を、笑顔に直して帰りける

後に六助無念の顔色

「さては柚が母を誑し込み、おのれが親と偽つて孝行ごかしに六助を深い処へやりをつたな。チエ、思へば／＼腹立ちや。卑怯未練の微塵彈正。おのれこのまゝ置くべきか」

と、胸も張り裂く怒りの齒がみ。庭の青石三尺ばかり思はず踏ん込む、金剛力

「イヤコレ婿殿待たしやれや。此方の腹を立てさつしやる、相手の苗字は微塵とな」

「いかにも。おのが流儀をそのまゝに氏となしたる微塵彈正」

「ナニその流儀の名が微塵とな。シテその者の年輩は」

「三十三至極の骨柄。面体白く目のうち冴え、左の眉に一つの黒子。慥かにあり／＼左の肘二の腕か

けて刀疵

「やさてこそな。同じ家中と云ひながら、お園と云ひこの母も、見知らぬ敵の人相書、妹に尋ねその砌、みぎり書かせて置いたるこの姿絵」

「人相といひ年の頃、割符の合うたは尋ぬる敵」

「親の敵」

「菊が仇」

「恨みを晴らすは今この時」

「ア、嬉しや娘片時も早う」

「母様用意」

と勇み立つ

「コレ伯父様。ぼんにも敵討たしてや」

「オ、出かした。賢い／＼強いなア。どりや行かうか」

と云ふよりはやひらりと庭へ一足飛びこゝろも

「コレ／＼婿殿。軽き相手と侮つて、必ず不覺を取るまいぞ」

「さうとも／＼騙すに手無し、油断なされなこちの人」

「ム、ハ、ハ、何さ／＼氣遣ひ無用。一旦こそは得心にて負けてやつたる蛆虫うずむしめ。謀り取つたる五百石

抱へられたもわが情け。却つて足を繋つなぎしは、もつ

けの幸ひ。塞翁がうまう出会つた妻姑、恨みはとも

に六助も天地に恥ぢる義の一字、鬼神とて京極内匠。

わが見る目にはひとつまみ。しかしご知行戴く内は、

殿の御家人討ち得難し。試合を願ひ勝つた上、直ぐ

に仇討ち御免の訴訟。元首押さへて討たさす」

と実けにも鋭き魂を、見極め置きし吉岡が眼力違たがはぬ、若者なり

お園はなほも勇み立ち、咲き乱れたる紅梅の花の一

枝折り持つて

「ナウ／＼わが夫。かじわらげんだかけすえ梶原源太景季は平家の陣に斬り

入つて、誉れを上げしえびら簀の梅。これは敵の京極に勝

つ色見するこの花の、とのいかわいい男へことぶき寿」

と、云ひつゝ抱だき付きたさも親に遠慮の手をもぢ

〈

母も同じく椿の一枝

「本望遂げたその上ですぐに八千代の玉椿、変はら

ぬ色の花婿殿。いざ」

と打ち連れ立ち出づる三人が中に

やそまつ弥三松は、ほんさう小倉の領内へ勇み、進んで出で

て行く

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

